

## 増補仙穴考\*1—『列仙傳』 邦子の事例を中心として 大形 徹

注1…2006年6月20日和泉シティプラザで「トンネルをぬけるとあの世であったという話—この世とあの世を結ぶもの」という講演を行った。その後、「仙穴考—『列仙傳』 邦子の事例を中心として」として人文学論集、第25集、2007年に掲載した。今回、明らかな誤植等について修正を加え、一部、加筆し、また嵩山に関連する現地の写真を追加したため、原題に「増補」を加え、「増補仙穴考—『列仙傳』 邦子の事例を中心として」とした。そのため、本文および注に「トンネル」の語が、いくつかあらわれる。

注2…月本昭男訳『ギルガメシュ叙事詩』（岩波書店、2004年）165頁に、79さあ、[冥界に]穴を[開けるがよい。] 80[エンギドゥウの]死霊が[靈風のように冥界から出て来られるように、]とみえる。

注3…拙稿『神仙思想の成立に関する研究』（平成14・15・16・17年度科学研究費補助金（基盤研究）（C）（2）にもとづく研究成果、2006年）を参照。

注4…『後漢書』方術伝下、上成公に「家人見其舉歩稍高、良久乃没云」とみえる。

はじめに

信貴山朝護孫子寺には戒壇めぐりとよばれる場所がある。本堂の地下が回廊のようになっていて、真っ暗闇の中に入っていく。手探りで進むと、その先にかすかな光明がみえ、ついには、そこを抜け出るといふ仕掛けである。暗い穴に入り、最後はそこから抜け出るといふ仕掛けは、宗教的な「死と再生」を実感させるための装置なのであろう。「死」は真っ暗闇に象徴される地下世界と同一と意識されているように思われる。ギルガメシュには、冥界の穴から死霊が出てくる\*2ことが記される。これは『後漢書』にひく『山海経』の鬼門からよろずの鬼が出入する話に似る。『春秋左氏伝』隱公元年には「不及黄泉、無相見也」と「黄泉」の語がみえ、それは後漢から六朝にかけての墓券にも数多くみえるが、地下世界である冥界を示す語のようである。『古事記』のイザナミ、イザナギの話も、その延長線上にあるようにみえる。古事記の場合は暗い坂道を下るのでトンネルに近い。

古代の中国人は死者の魂は死後も存続し、あの世で暮らすと考えていたようだ。仙人（僊人）は本来、不老不死の人ではなく、魂があの世に遷った人（遷人＝僊人＝仙人）であったように思われるが\*3、仙人の世界と死者の世界は、重なりあい、つながっている部分も少なくない。それでは、その仙界あるいは死者の世界であるあの世は、一体どこにあって、どのようにして行けばよいのであろう。『詩経』にみえる文王は死後、「文王陟降、在帝左右」（文王之什）と天にのぼって帝（上帝）の左右にすることが説かれている。『抱朴子』には天仙・地仙・尸解仙の区別がある。天仙はたんなるランクづけだけでなく、最上の場所として天界が想定されているようだ。『後漢書』方術伝には、あたかも階段を昇るように空中を歩み、空高く消えていった仙人もいる\*4。

しかしながら、本稿で紹介する山穴（『列仙傳』・『搜神後記』）、仙穴（『列仙傳』讚）、大穴（『搜神後記』）、一穴（『幽明録』）、小口（『桃花源記』）、石穴（『博異志』）、天井（『搜神後記』）、井（『博異志』）、門（『搜神後記』）、大門（『博異志』）、通天関（『博異志』）といったトンネル状のものを通り抜けて、あの世に到着するといった例も多くみえる。その場合、行き先は山中なのか、それとも地下なのか、はたまた天界なのだろうか。ここでは、そのような例をいくつか集めて、なぜ、トンネルをめぐりぬけねばならないのかについて考察したい。それらの話の中では地下世界\*5と天界が混在しているようなイメージを受ける。

そしてそのような話の原形ともみなしうるのが、本稿でとりあげる『列仙傳』の邗子の話である。小川環樹は、「中國の樂園表象— 魏晉時代以後（三世紀以降）— 仙郷に遊んだ説話—」の中で51もの説話をとりあげ、本稿のとりあげる問題についてもすでに考察をくわえている\*<sup>6</sup>。しかしながら、それらの説話は「魏晉時代以後（三世紀以降）」に限定されているため、前漢の劉向撰とされる『列仙傳』については、考察の対象になっておらず、この邗子の話についても、全く触れられていないのである。またそれらの説話を小説としてとらえているが、『列仙傳』などの仙伝は仙人になった事例として収集されたものであり、小説とは一線を画して考えるべきであろう。そう考えた時、この邗子の話は、かなり重要な意味をもってくると思われる。また原文を子細に読み込んでいくと、『桃花源記』や浦島太郎の話の原形である『丹後国風土記』にも大きく影響を与えている部分が見出され、興味深いものがある。

## 一、『列仙傳』の邗子

『列仙傳\*<sup>7</sup>』は前漢の劉向撰とされているが、その中に後漢の地名や諱があらわれることから、実際には後漢の作ではないかとされている。その『列仙傳』巻下に邗子（せんし）の話がみえる。ここはあえて、「せんし」とルビをふった。「邗子」は、これまで「かんし」と書かれることが多く、私自身もかつては「かんし」と書いていた\*<sup>8</sup>。けれども、本来、「邗」は「𡗗」「𡗘」で、それは「遷」・「僊」と同じ意味で、「邗子」とは「遷子」・「僊子」、つまり、あの世に遷った人、すなわち「僊人（仙人）」という意味ではないかと思われる。

邗子の話は以下のようなものである。

邗子なる者、自ら言う蜀人なりと。犬子を放つを好む。時に犬走りて山穴に入る有り。邗子、随い入ること十餘宿、行きて數百里を度り、上りて山頭に出づ。上に墓殿官府有り、青松樹、森然たり。仙吏侍衛すること甚だ嚴、故婦、魚を洗うを主るを見る。邗子に符一函並びに藥を與え、便ち還り成都の令、喬君に與えしむ。喬君、函を發くに魚子有り。池中に著き之れを養うこと一年、皆、龍形と爲る。復た符を送り山上に還らしむ。犬の色赤に更り、長翰有り。常に邗子に随い、往來すること百餘年、遂に山上に留止す。時に下り來たりて其の宗族を護る。蜀人、祠を穴口に立つ。常に鼓吹傳呼の聲有り。西南數千里、共に奉祠す\*<sup>9</sup>。

トンネル状の山穴を抜ける話\*<sup>10</sup>としては、この話がもっとも古いのではないかと思われる。そのため他の同様の話の原形となっている可能性がある。こ

注5…吉永慎二郎は、「中国文明における帝と天の觀念の展開—その思想的考察」（『秋田中国学会50周年記念論集』、2005年）において、殷人の他界観は地下型と考えている。それはオリエントなどの影響を受けており、周になって天界になったとしている。

注6…小川環樹『中国小説史の研究』（岩波書店、1968年）、第9章 神話より小説へ—中國の樂園表象— 魏晉時代以後（三世紀以降）— 仙郷に遊んだ説話一。仙郷にかかわる説話五十一篇を取り上げ、それを八つに分類している。以下、その内容を簡単に紹介する。(1)山中または漂着。仙郷の所在は山おくに設定されるものを通例とする。ただし海中の島に在るとし、漂着した人が到達する話もある。(2)洞穴。仙郷に到着するまでの途中、洞穴を通りぬけるというすじをもつ話は大へん多い。(3)仙藥と食物。仙藥を與えられるか、またはそれ以外の食物をたべること。(4)美女および婚姻。仙郷で美女に出あい、婚姻を結ぶこと。(5)道術と贈り物。仙郷に行った人が何かの法術を授けられるか、または有形の贈り物を受けとること。(6)懐郷・勸歸。(7)時間。仙郷における時間の経過速度を強調することは、かなり多い。(8)再歸と不成功。ひとたび人界へ歸りついた人が、仙郷

へもう一度もどることができたかどうか。最も多いのは、後日仙郷を求めて目的を達しなかった場合である。このうち「(2) 洞穴」が小論のテーマと直接かかわっている。その具体的な話(全部で51)は、上田義文・小川環樹・加藤龍太郎・佐々木理編『文学における彼岸表象の研究』(中央公論社、1959年)に紹介されている。そこではB魏晉時代以降(三世紀以降)―仙郷に遊んだ説話―a 仙郷へいった話、b 仙郷へいった話 続集、として考察されており、『列仙傳』は含まれていない。

注7…『列仙傳』は前漢の劉向(79～8B.C.)撰とされているが、実際には後漢あたりの作と考えられている。鑑賞中国の古典九『抱朴子・列仙伝』(尾崎正治・平木康平・大形徹、角川書店、1987年)『列仙伝』解説を参照。

注8…前掲『抱朴子・列仙伝』

注9…邗子者自言蜀人也。好放犬子、時有犬走入山穴。邗子隨入十餘宿、行度數百里、上出山頭。上有台殿官府、青松樹森然、仙吏侍衛甚嚴、見故婦主洗魚、與邗子符一函并藥、便使還與成都令喬君。喬君發函、有魚子也。著池中、養之一年、皆爲龍形。復送符還山上、犬色更赤、有長翰。常隨邗子、往來百餘年、遂留止山

こでは犬が重要な役割を果たす。犬が先導し「山穴」に入っていく。この山穴は、『列仙傳』につけられた讚の中では、「仙穴」とされている。鏡銘には「仙人」の意味で「山人」とされる場合が多い。また『列仙傳』の山圖は本来、山圖ではないかと述べたことがある。いずれも、「山」が「仙」の意味でつかわれている。それらの例を考えれば、ここで「山穴」とされているものが、「仙穴」の意味であってもおかしくはなく、事実、讚では山穴を仙穴として解釈しているのである。

犬は番犬としての役割を担われることが多いが、死後の世界を守護する役割もあったように思われる。中山王国の墓から出土した犬<sup>\*11</sup>には金と銀の首輪が嵌められていたが、それは王を守護するために殉葬されたものであろう。殉葬された犬は靈魂となっても王の魂を悪霊から守るのだろう。生きている犬にも靈界へと導く力があるとされたようで、つぎにとりあげる『幽明録』の黄原の話にみえる青犬もこのこと同様の役割を担われている。

この犬が本来、何色であったのかはよくわからないが、赤くかわる。『列仙傳』では赤は多くみえる色である。色がかわっただけではなく、長翰つまり長い羽根が生える。仙人の話の中で背中に羽根が生えてくる例はそれほど多くはない。けれども、画像石や鏡の図像に数多あらわれる羽人は文字通り羽根の生えた人であり、動物に羽根の生えた図像もまた龍・虎など枚挙にいとまがない。羽人には明かに漢民族とは異なる西域風の顔立ちの者があり、動物に羽根の生えた図像もまたスフィンクスをはじめ、オリエントやエジプトに数多く存在する。中国では戦国時代のものとされる銅管の図や、漢代の画像石にみえる動物に数多い。この犬の羽根もおそらくそうといったものの影響であろう。羽根が生えるということは、もちろん、天界に暮らすイメージである。

邗子は山穴に入ったものの、十余宿、數百里をへて、いつしか、それを抜けて、「上りて山頭に出づ」と山頂に抜けでている。この山が何山なのかは知れないが、たんに麓からのぼって行き着けるものではないとされているようにみえる。いったん、地下の暗黒を抜ける事に意味があるのだろう。「上に台殿官府有り、青松樹、森然たり。仙吏侍衛すること甚だ嚴」というのは、仙界が人間界と同様の官僚制度で構成されているイメージを受ける。現実の人間界の序列を意識し、それに影響された表現であろう。『列仙傳』では卷上、安期先生、卷下、服閭に蓬萊山の記述がみえ、卷上、赤松子に崑崙山の記述がみえるが、具体的にどのような場所であるのかは、それほど詳しく描写されているわけではない。

「故婦、魚を洗うを主るを見る」という記述は、ことに興味深い。「故婦」というからには、すでに亡くなった邗子の妻であり、ここは仙界であって同時に死者の世界である。僊・遷・仙は、魂があゝの世に遷った人ということだが、ここではじめてこの仙人が「邗子(僊子、仙子の意味)」と名づけられている意

味が理解できる。つまり、邗子は、あの世とこの世を遷り、往来できる人と設定されているのである。これは邗子の特徴であると同時にたんなる死者ではない仙人の特徴でもある。

故婦の与えた「符一函」と「薬」は、当時の道教の組織が発行していた符とかかわるであろう。符水と治病に関わっていた五斗米道の記述<sup>\*12</sup>を想起させる。『列仙傳』には薬の話がとくに多い<sup>\*13</sup>。この符は魚子にかわり、それがまた龍に変化したという。龍は天界と地上をつなぐ乗り物としての役割を果たしており、『列仙傳』においても卷下、騎龍鳴・陶安公の話などに、そのような用例が見られる。ただし、ここでは、この話はこれ以上発展しない。

「復た符を送り山上に還らしむ」の場合の符は、台殿官府に到るための通行手形のようにみえ、符の本来の用法に近い。『抱朴子』には、「老君入山符」・「入山辟虎狼符」などの昇山符が記されている。

「成都の令、喬君」と、具体的な地名と人名が挙げられているが、これが誰なのかは未詳。「蜀人、祠を穴口に立つ。常に鼓吹伝呼の声有り。西南数千里、共に奉祠す」は祠があったとことを記す。『列仙傳』には他にも祠の記述が多くある。仙人の話が各地に存在した「祠」を核として、祠に祀られているものが、じつは仙人であった、という形で形成されたのではないかと思われる<sup>\*14</sup>。ここもその一例であろう。

以下、邗子につけられた讚をここに掲げる。

邗子尋犬宕入仙穴  
館閣峩峩青松列列  
受符傳藥往來交結  
遂棲靈岑音響昭徹

邗子犬を尋ね<sup>ほし</sup>宕いままに仙穴に入る  
館閣峩峩青松列列  
符を受け薬を傳え往來交結し  
遂に靈岑に棲み音響昭徹す

讚は本文の内容を要約したような形になっている。山穴が仙穴になっていることはすでに指摘したが、山に穿たれたこの穴を通る事に意味があるのであろう。

## 二、泰山の黄原

つぎに、劉宋、劉義慶（403～444）撰『幽明録』にみえる話を紹介しよう。

上、時下來護其宗族。蜀人立祠於穴口、常有鼓吹傳呼聲、西南數千里共奉祠焉。訳注は前掲『抱朴子・列仙傳』、邗子参照。『列仙傳』のこの部分は大形が担当したが、今回の考察にあっても、その原稿を下敷きにしている。

注10…トンネルではない話では、『史記』司馬相如伝に「西王母…載勝穴處兮」とみえる。『列仙傳』では西王母は石室にいる（卷上、赤松子）。いずれも通り道ではなく、そこが住処である。澤田瑞穂「洞穴の神と財宝」は日本の「椀貸穴」の伝説の淵源を中国に求めたものだが、洞穴に住む神や仙人の話が多く記されている。

注11…『中山王国文物展』、東京国立博物館他編集、1981年。

注12…『三国志』張魯伝の注に引く魚豢の『典略』には、「光和中、漢中有張修、爲五斗米道。教病人叩頭思過、飲符水、加施静室、使病人在室中思過」とみえる。

注13…拙稿「『列仙傳』にみえる仙薬について」（『人文学論集』第6集、1988年、大阪府立大学人文学会）を参照。

注14… 祠については拙稿「仙人と祠一『列仙傳』の事例を中心として」、『人文学論集』第20集、2002年、大阪府立大学人文学会)を参照。

注15… 漢時太山黄原、平旦開門、忽有一青犬在門外伏守、備如家養。原繼犬、隨鄰里獵、日垂夕見一鹿、便放犬、犬行甚遲、原絶力逐終不及。行數里、至一穴、入百餘歩、忽有平衡槐柳列植、行牆迴匝、原隨犬入門、列房櫺戸可有數十間、皆女子、姿容妍媚、衣裳鮮麗、或撫琴瑟、或執博碁。至北閣、有三間屋、二人侍直、若有所伺。見原、相視而笑、「此青犬所致妙音婿也。一人留、一人入閣。須臾、有四婢出、稱太真夫人白黄郎、有一女年已弱笄、冥數應爲君婦。既暮、引原入内。有南向堂、堂前有池、池中有臺、臺四角有徑尺穴、穴中有光映帷席、妙音容色婉妙、侍婢亦美。交禮既畢、宴寢如舊。經數日、原欲暫還報家、妙音曰、人神異道、本非久勢。至明日、解珮分袂、臨階涕泗、後會無期、深加愛敬、若能相思、至三月旦、可修齋潔。四婢送出門、半日至家。情念恍惚。每至其期、常見空中有駟車髣髴若飛。法苑珠林三十一、幽明録

注16… 一歩は魏で1.4472メートル、隋で1.7706メートル。

漢の時、太山の黄原、平旦、門を開くに、忽ち一青犬有り、門外に在りて伏し守り、備うること家に養わるるが如し。原、犬を繼ぎて、鄰里に隨いて獵す、日、夕に垂んとして一鹿を見、便ち犬を放つ、犬行くこと甚だ遅し、原、力を絶くして逐うも終に及ばず。行くこと數里、一穴に至り、入ること百餘歩、忽ち平衡に槐柳列び植うる有り、牆を行ること迴匝、原、犬に隨い門に入り、列房櫺戸、數十間有る可し、皆な女子、姿容妍媚、衣裳鮮麗、或いは琴瑟を撫し、或いは博碁を執る。北閣に至り、三間の屋有り、二人侍直す、伺う所有るが若し。原を見て、相い視て笑う、此れ青犬の致す所の妙音の婿なり、と。一人留まり、一人閣に入る。須臾にして、四婢出づる有り、太真夫人の黄郎に白すらく、一女有り、年已に弱笄、冥數、應に君の婦と爲るべし、と、と稱す。既に暮となり、原を引きて内に入る。南向堂有り、堂前に池有り、池中に臺有り、臺の四角に徑尺の穴有り、穴中より帷席を光映する有り、妙音容色婉妙、侍婢亦た美なり。交禮既に畢り、宴寢すること舊の如し。經ること數日、原、暫らく還り家に報ぜん欲す。妙音曰く、人神、道を異にす、本より勢を久しくするに非ず、と。明日に至り、珮を解き袂を分かち、階に臨み涕泗す、後ち會うこと期する無し、深く愛敬を加え、若し能く相思えば、三月の旦に至り、齋潔を修む可し、と。四婢送りて門より出づ、半日にして家に至る。情念恍惚として。其の期に至る毎に、常に空中に駟車有り髣髴として飛ぶが若し\*15。(『珠林』三十一、『幽明録』)

ここでも犬(青犬)があらわれ、その犬に先導されて、一穴に入り、そのあと、「入ること百餘歩\*16」と長い時間を経て、仙界とおぼしき世界に到着する。建物の様子が描かれることは、先にみた『列仙傳』と似ているが、ここでは故婦ではなく、すでに婚約が決まっている妙音という名の女性があらわれ、夫婦として暮らしはじめる。

ここで興味ぶかいのは、太山の黄原は、あくまでも人であって、仙人としては扱われていないことである。「人神、道を異にす、本より勢を久しくするに非ず」と、あくまでも妙音が神で、黄原が人であり、その差は埋まらない。また還る時は、門から出るとあり、もときた穴ではないようだ。

「南向堂有り、堂前に池有り、池中に臺有り、臺四角にして徑尺の穴有り、穴中より帷席を光映する有り…」と、この話の中には、さらに「穴」があらわれる。池の中に台があり、そこには直径一尺の穴があり、そこから光があふれでているように表現されている。池の中にある建物というのは、東海の蓬莱山に見立てているようにみえる。入れ子構造になっている更なる仙界のようにみえるが、それ以上のことはわからない。

### 三、會稽剡縣民袁相、根碩

「會稽剡縣民袁相、根碩」の話は、『搜神後記』所収のものである。東晋、陶淵明（365～427）撰とされるが、仮託とされている。そのため確実な資料としては用いることはできないものの内容をみてみよう。

會稽、剡縣<sup>\*17</sup>の民、袁相、根碩の二人獵す、深山重嶺を經ること甚だ多し。一羣の山羊、六七頭を見、之れを逐う。一石橋を經るに、甚だ狭くして峻なり。羊去り、根等も亦た隨い渡るに、絶崕に向かう。崕正に赤く、壁立ち、名づけて赤城と曰う。上に水有り流れ下る。廣狹なること匹布<sup>\*18</sup>の如し。剡人、之れを瀑布と謂う。羊徑<sup>\*19</sup>に山穴有り、門の如く、豁然。過りて既に入り、内甚だ平敞<sup>\*20</sup>、草木皆な香る。一小屋有り、二女子、其の中に住まう。年皆な十五六、容色甚だ美、青衣<sup>\*21</sup>を著る。一は瑩珠と名づけ、一は□□<sup>\*22</sup>と名づく。二人の至るを見て、欣然として云う、早に汝の來たるを望む、と。遂に室家を爲す。忽ち二女出で行き、復た婿を得る者有り、往きて之れを慶す、云う。履を絶巖上に曳きて行き、琅琅然たり。二人歸らんことを思い、歸路に潛去す。二女還るを追い、已に知りて<sup>\*23</sup>乃ち謂いて曰く、自ら去る可し、と。乃ち一腕囊<sup>\*24</sup>を以て根等に与え、語げて曰く、慎みて開くこと勿かれ、と。是に於て乃ち歸る。後ち出でて行くに、家人其の囊を開き視る。囊、蓮花の如く、一重、去れば、一重、復し<sup>\*25</sup>、五たび蓋う<sup>\*26</sup>に至る。中に小青鳥有りて、飛び去る。根還りて此れを知り、悵然とするのみ。後ち根、田中に於て耕し、家、常に依りて之れに餉<sup>\*27</sup>るに、田中に在りて動かざるを見る。就きて視るに、但だ殼の蟬蛻<sup>\*28</sup>の如き有るのみ<sup>\*29</sup>。

ここでは袁相、根碩という二人の人物があらわれる。犬が先導するのではない。あらわれる動物は羊であり、その羊も先導しているのかどうかは微妙なところである。「山穴有り、門の如く、豁然」と、ここでは「山穴」である。ただし、その中を何日もぐりぬけていくという話にはなっていない。「門」のようだとされている。ここでは、「年皆な十五六、容色甚だ美、青衣を著る。一は瑩珠と名づけ、一は□□と名づく」と、年頃の女性が待ち受けている。「早に汝の來たるを望む」と、先にみた『幽明録』の話に類似したものとなっている。ここでも人間界の二人は、ともに仙女とおぼしき二人と結婚するが、やはり、里心をおこして、人間界に帰ろうとする。その時に、「一腕囊を以て根等に与え、語げて曰く、『慎みて開くこと勿かれ』と、『腕囊』を与える。これは、あとも指摘するように、日本の浦島の子の物語にみえる「玉手箱」の原形であろう。「家人其の囊を開き視る。囊、蓮花の如く、一重、去れば、一重、復し、五

注17…剡縣は浙江省の地名。

注18…匹布。匹は、布帛四丈。丈は魏で約2.412メートル、隋で2.951メートル。

注19…羊徑。山名では山西省。ここは羊の通る道か。

注20…敞、高い、広い。

注21…青衣。身分の低い者の服。腰元や下女の服。

注22…二文字欠字。『津逮秘書』所収の『搜神後記』では■■に塗りつぶされている。

注23…『搜神後記』3頁は、「追還已知。『太平御覽』作「已知追還」。当拋正。」という。『太平御覽』の「已知追還（已に知りて還るを追い）」の方がわかりやすい。

注24…腕にくくりつけた袋と解した。他の文章での用例は未詳。

注25…前掲『搜神後記』には、『太平御覽』が「一重複」を「復一重」（復た一重）に作ることを指摘する。その方がわかりやすい。

注26…『太平御覽』では蓋は盡。五に至りて盡(つ)く。その方がわかりやすい。

注27…餉。しょう。おくる。かわいい。田畑で仕事する人の食料。弁当。

注28…もぬけ。尸解仙の象徴。この話は浦島の子の話に似るが、最後は肉体の中身がなくなる尸解仙となったと暗示されている。

注29…會稽剡縣民袁相、根碩二人獵、經深山重嶺甚多、見一羣山羊六七頭、逐之。經一石橋、甚狹而峻。羊去、根等亦隨渡、向剡峴。峴正赤、壁立、名曰赤城。上有水流下、廣狹如匹布。剡人謂之瀑布。羊徑有山穴如門豁然、而過、既入、內甚平敞、草木皆香。有一小屋、二女子住其中、年皆十五六、容色甚美、著青衣。一名瑩珠、一名□□。見二人至、欣然云、早望汝來。遂爲室家。忽二女出行、云、復有得婿者、往慶之。曳履於絕巖上行、琅琅然。二人思歸。潛去歸路。二女追還、已知乃謂曰、自可去。乃以一腕囊与根等、語曰、慎勿開也。於是乃歸。後出行、家人開視其囊、囊如蓮花、一重去、一重復、至五蓋、中有小青鳥、飛去。根還知此、悵然而已。後根於田中耕、家依常餉之、見在田中不動、就視、但有殼如蟬蛻也。

注30…鳥が魂をあらわす例は中国だけではない。エジプトでは人面鳥のバーが魂とされている。

注31…この話は、『藝文類聚』卷第七山部上、嵩高山にみえ、注に「初學記五、太平御覽三九作劉義慶世説、按亦見幽明録、(古

たび蓋うに至る。中に小青鳥有りて、飛び去る」とある。「小青鳥<sup>\*30</sup>」は魂の象徴であろう。日本でいう玉手箱も、たんに珠でできた匣というだけでなく、魂が入っている箱(匣)の意味も含んでいるのであろう。

根碩は、「但だ殻の蟬蛻の如き有るのみ」と、蟬蛻のようになってしまうが、これは尸解仙の形態である。梁、陶弘景の『真誥』の中にみえる。ただし、ここでの文脈では積極的に仙人になったということではなく、むしろ、死去したことを示しているようにみえる。なお、もう一人の袁相の方がどうなったのかについては、何もふれられておらず、消化不良の印象をうける。

#### 四、嵩高山

嵩高山の話もまた『搜神後記』にみえる<sup>\*31</sup>。

嵩高山の北に大穴有り、其の深さを測る莫し。百姓、歳時游觀す。晉初、嘗て一人誤りて穴中に墮つる有り。同輩其の儻いは死せざるを冀て、食を穴中に投ず。墜つる者之れを得て、穴を尋ねて行るを爲す。計ること十餘日可り、忽然として明を見る。又た草屋有り、中に二人有り對坐して棋を圍む。局下に一杯の白飲有り。墜つる者告ぐるに飢渴を以てす、棋者曰く、此れを飲む可し、と。遂に之れを飲み、氣力十倍す。棋者曰く、汝此に停まらんと欲するや否や、と。墜つる者停まるを願わず。棋者曰く、此れ従り西行するに、天井有り、其の中に蛟龍多し。但だ身を投じ井に入れば自ら當に出づべし。若し餓うれば、井中の物を取りて食らえ、と。墜つる者、言の如くし、半年許り、乃ち蜀中に出で、洛下に歸り張華に問う。華曰く、此れ仙館の大夫。飲む所の者は玉漿なり。食らう所の者は、龍穴の石髓なり、と<sup>\*32</sup>。

ここでも「大穴」とみえるが、嵩高山は太室山、少室山とよばれ、そこには石室と呼ばれる地中の空間が多くあったようだ。唐、歐陽詢撰、『藝文類聚』卷第九水部下、湖に

風土記に曰く、陽羨縣の東に太湖有り。中に包山有り、山下に洞穴有り、地中に潛行し、通ぜざる所無しと云う。之れを洞庭地脈と謂うなり<sup>\*33</sup>。

とみえる。

『風土記』は晉の周處が撰したとされる書物である。地下の洞穴があちこちつながっている様子を記している。嵩高山(河南省)と太湖(江蘇省)は離れ

てはいるが、同様の地形であったのだろう。また嵩高山は三十六洞天<sup>\*34</sup>のうちの一つ中嶽嵩山洞とされており、全国にそのような地形があったとされている。ここでは、最終的に四川省の蜀に出たとされている。

地下を十餘日さまよって出会った棋を圍む者は、晋の張華（232～300）によって「此れ仙館の大夫」と仙人の館に住む大夫だとされている。張華は『博物志』の作者として知られているため、その博識を利用した作り話であろう。五代の杜光庭の『洞天福地嶽瀆名山記』では、それぞれの洞天は仙人や真人などが治めている。たとえば中嶽嵩山洞は、「周回三千里、名曰司馬洞天、在東都登封縣、仙人鄧雲山治之」と、仙人の鄧雲山が治めているとされ、峨眉山洞は、「周回三百里、名曰虛陵洞天、在嘉州峨嵋縣、真人唐覽治之」と、真人の唐覽が治めているとされている。ここの記述は、そういったものに影響を与えているように思われる。

なおここに出てくる石髓は『列仙傳』叩疏にも「煮石髓而服之、謂之石鍾乳」とみえる。石灰岩地帯と洞穴、鍾乳石服用は、関連するものである。おそらく白飲は石髓（鍾乳石）の汁だろうが、ここでは張華がそれを「玉漿<sup>\*35</sup>」と説明したことになる。これは玉の汁。玉の液であろう。石髓とは同じではないが、玉や石のような腐らないものを体に取り入れることによって、不死となるという発想であろう。『抱朴子』には、「玉を服する者は、壽、玉の如し<sup>\*36</sup>」とみえる。

張華の『博物志<sup>\*37</sup>』巻一には、

河圖括地象に曰く、地南北三億三萬五千五百里、地祇の位<sup>\*38</sup>、形高大なる者を起す。崑崙山有り、廣さ萬里、高さ萬一千里、神物の生ずる所、聖人、仙人の集まる所なり。五色の雲氣、五色の流水を出だす、其の白水、東南のかた流れて中国に入る<sup>\*39</sup>、名づけて河と曰うなり。其の山中、天に應じ、最も中に居り、八十城布きて之れを繞る。中國は東南隅、其の一分に居る、是れ好城なり。崑崙山の東北、地轉<sup>うた</sup>た下り<sup>\*40</sup>、三千六百里、八元幽都有り、方二十萬里<sup>\*41</sup>、地下に四柱有り<sup>\*42</sup>、名山大川、孔穴相い内し、和氣の出づる所、則ち石脂玉膏を生じ、之れを食らわば死せず、神龍靈龜、穴中を行る<sup>めぐ</sup><sup>\*43</sup>。

とみえる。

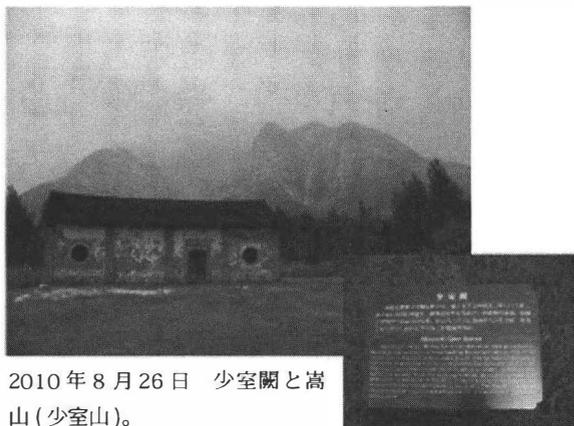
緯書の『河圖括地象』を引用してのものだが、地下世界が想定され、そこには不死薬としての石脂玉膏があるとされている。このようなことを認識していたという想定のもとで張華を登場させているのであろう。

小説鉤沈謂唐宋類書引幽明録、時亦題世説、是也）」とみえる。「世記曰、嵩高山北有大穴、莫測其深。百姓歲時每遊觀其上。晉初、嘗有一人誤墮穴中、同輩冀其儻不死、乃投食於穴中、墜者得之、爲尋穴而行、計可十許日、忽曠然見明。又有草屋、中有二人、對坐圍碁、局下有一杯白飲。墜者告以飢渴、碁者曰、可飲此。墜者飲之、氣力十倍。半年許、乃出于蜀中。歸洛下、問張華。華曰、此仙館大夫、所飲者玉漿也」と、やや簡単になっている。

注32…嵩高山北有大穴、莫測其深。百姓歲時遊觀。晉初、嘗有一人誤墮穴中。同輩冀其儻不死、投食于穴中。墜者得之、爲尋穴而行。計可十餘日、忽然見明。又有草屋、中有二人對坐圍碁。局下有一杯白飲。墜者告以飢渴、碁者曰、可飲此。遂飲之、氣力十倍。碁者曰、汝欲停此否。墜者不願停。碁者曰、從此西行、有天井、其中多蛟龍。但投身入井自當出。若餓、取井中物食。墜者如言、半年許、乃出蜀中。歸洛下、問張華、華曰、此仙館大夫、所飲者玉漿也、所食者龍穴石髓也。

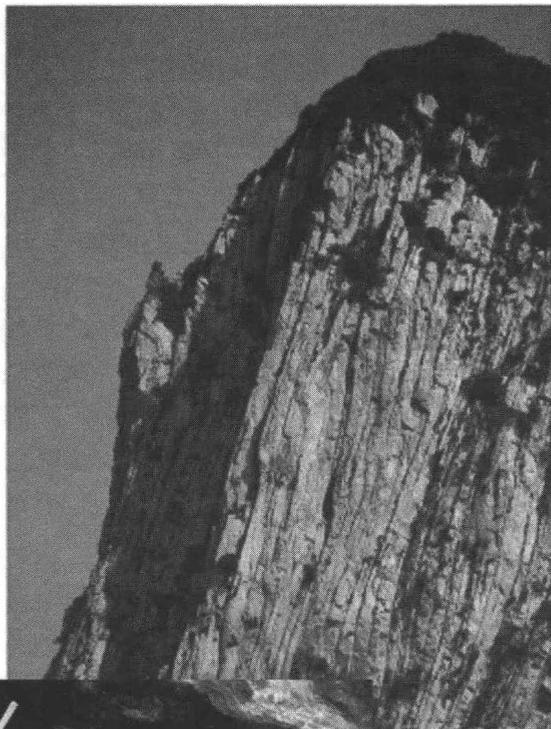
注33…風土記曰、陽羨縣東、有太湖。中有包山、山下有洞穴、潛行地中、云無所不通。謂之洞庭地脈也。

注34…『雲笈七籤』卷廿七には、霍桐山洞、東嶽泰山洞、南嶽衡山洞、西嶽華山

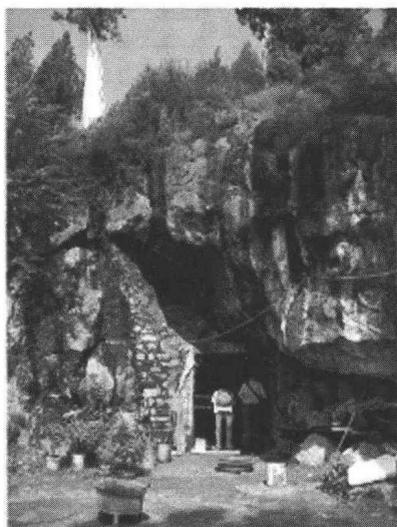


2010年8月26日 少室関と嵩山(少室山)。

同、少室関の説明文。後漢、安帝の延光二年(123年)に建てられた、少室山の前にあった神道関。いまは全体を建物で覆って保護している。



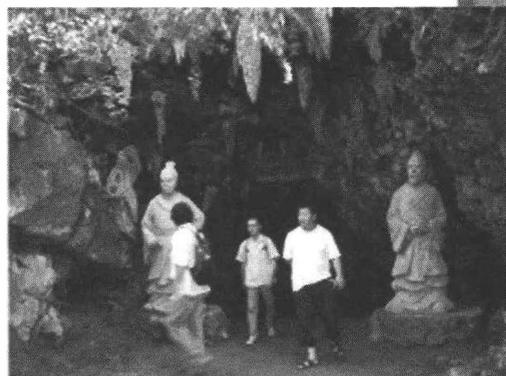
2010年8月29日、嵩山(太室山)の山肌。



2010年8月28日、嵩山付近。玉皇殿わきの洞窟。

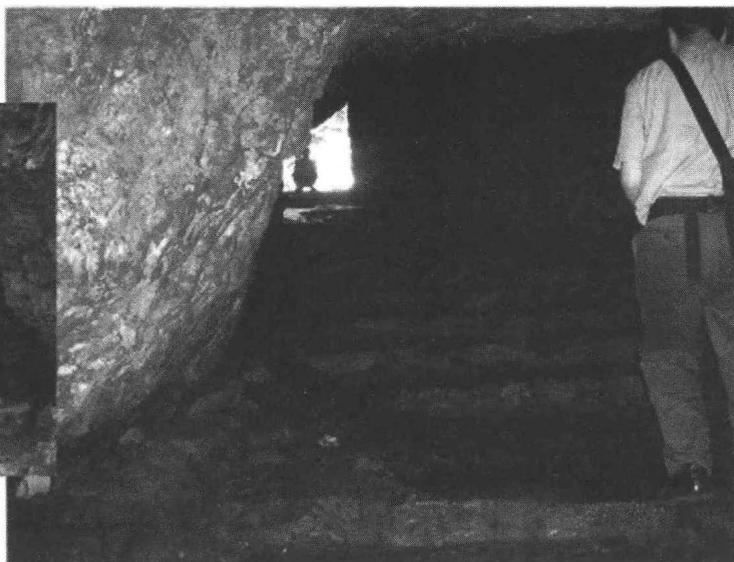


左洞窟の内部 神像が飾られている。



2010年8月28日、嵩山付近。大禹神話洞と名付けられた洞窟。

嵩山の洞の写真(筆者撮影)



その内部より外を見たところ。かなり深い。

## 五、陰隱客

唐、鄭還古著『博異志』にみえる陰隱客の話は、かなり複雑なものとなっている。

唐、神龍元年、房州竹山縣の百姓、陰隱客、家富む。莊の後に井を穿つこと二年、已に浚えること一千餘尺にして水無し。隱客、穿鑿の志輟まず。二年の外、一月餘、工人忽ち聞く、地中の雞犬鳥雀の聲。更に鑿つこと數尺、傍に一石穴に通ず。工人乃ち穴に入り之れを探る。初め數十歩見る所無し、但だ壁を捫で傍行し、俄かに轉じて日月の如きの光有り、遂に下る。其の穴下りて一山峰に連らなる。工人乃ち山を下る。正立して視るに、則ち別に一天地、日月、世界あり。其の山傍、萬仞に向かい、千巖萬壑、靈景に非ざる莫し。石盡く碧琉璃色。巖壑毎に中に皆な金銀の宮闕有り。大樹有り、身、竹の如くにして、節有り、葉、芭蕉の如く、又た紫花有り盤の如し。五色の蛺蝶、翅大なること扇の如く、花間に翔舞す。五色の鳥大なること鶴の如く、樹杪に翱翔す。巖毎に中に清泉一眼有り、色鏡の如し、白泉一眼、白きこと乳の如し。工人漸く下りて宮闕の所に至る、入りて詢問せんと欲す。行きて闕前に至り、牌上に署して天桂山宮と曰うを見る。銀字を以て之れを書く。門の兩閣内に、各おの一人有り驚き出づ。各おの長五尺餘り、童顔玉の如く、衣服輕細、白霧綠煙の如し、絳唇皓齒、鬚髮青絲の如く、首は金冠を冠りて跣足なり。顧みて工人に謂いて曰く、汝、胡爲れぞ此に至るや。工人具さに本末を陳ぶ。言うこと未だ畢らざるに、門中より數十人有り出でて云う、怪しき昏濁の氣有り、と。門を守る者を責めしむ。二人惶懼して言いて曰く、外界に工人有り、意わずして到り、途次を詢問す、未だ奏せざる所以なり、と。須臾にして、緋衣一人有り敕を傳えて曰く、門吏に敕す、禮して之れを遣れ、と。工人拜謝して未だ畢らざるに、門人曰く、汝已に此に至らば、何ぞ游覽畢りて返るを求めざらん、と。工人曰く、向には未だ敢えてせず、儻し從容することを賜わば、乞う便に乗じて之れを言わん、と。門人遂に一玉簡を通じて入り、旋りて玉簡卻りて出づ。門人之れを執り、工人を引きて行きて清泉眼に至り、洗浴せしめ及び衣服を澣わしむ。又た白泉眼に至り、之れを盥漱がしむるに、味、乳の如く、甘美なること甚だし。連らなり飲むこと數掬、醉えるが似くにして飽けり。遂に門人引きて山を下るを爲す。宮闕に至る毎に、只だ門外を得るのみにして入るを許さず。是の如くにして行を經ること半日、山趾に至る、一國城有り、皆な是れ金銀珉玉もて宮室城樓を爲し、玉字を以て題して云う、梯仙國と。工人、門人に詢ねて曰く、此の國、何如、と。門人曰く、此れ皆な諸仙初めて仙を得る者、關わりて此の國に送らる。修行すること七十萬日、然る後ち諸天或いは玉京、蓬萊、崑閩、姑射に至るを得、然れ

洞、北嶽常山洞、中嶽高山洞、峨嵋山洞、廬山洞、四明山洞、會稽山洞、太白山洞、西山洞、小鴻山洞、灊山洞、鬼谷山洞、武夷山洞、玉笥山洞、華蓋山洞、蓋竹山洞、都嶼山洞、白石山洞、岫嶼山洞、九嶷山洞、洞陽山洞、幕阜山洞、大西山洞、金庭山洞、麻姑山洞、仙都山洞、青田山洞、鐘山洞、良常山洞、紫蓋山洞、天目山洞、桃源山洞、金華山洞が記されている。五代道士、杜光庭は『洞天福地岳瀆名山記』の中でも、詳述している。三浦國雄「洞天福地小論」(『東方宗教』第61号、日本道教学会、1983年)、同『中国人のトポス—洞窟・風水・壺中天』(平凡社、1988年)の「洞天福地小論」、「洞庭湖と洞庭山—中国人の洞窟觀念」および拙稿「洞天における山と洞穴—委羽山を例として」(『洞天福地研究』第一号)を参照。

注35…『本草綱目』金石部第八卷玉に玉泉として項目が立てられ、釋名に玉漿(開寶)としてみえる。

注36…服玉者壽如玉。

注37…叢書集成新編43、新文豐出版、1985年。指海(清道光錢熙祚校刊本)所収のもの。

注38…御覽三十六、祁疑即祁字之壞、俗本並作部。(錢熙祚による校勘)

注39…白水二字、原合爲泉、又脱東字。並依御覽三十八補正、與後漢書張衡傳注、引河圖分合。(錢熙祚による校勘)

注40…原脱之東二字。依初學記五、御覽三十六補正。(錢熙祚による校勘)

注41…初學記萬上有餘字。(錢熙祚による校勘)

注42…御覽作八柱、文選海賦注引括地象、仍御覽改。(錢熙祚による校勘)

注43…河圖括地象曰、地南北三億三萬五千五百里、地祗之位、起形高大者。有崑崙山、廣萬里、高萬一千里、神物之所生、聖人仙人之所集也。出五色雲氣、五色流水、其白水東南流入中國、名曰河也。其山中應于天、最居中、八十城布繞之。中國東南隅、居其一分、是好城也。崑崙山之東北、地轉下、三千六百里、有八元幽都、方二十萬里、地下有四柱、名山大川、孔穴相内、和氣所出、則生石脂玉膏、食之不死、神龍靈龜、行於穴中矣。

注44…唐〔顧氏文房小説本は唐の文字がない〕神龍元年、房州竹山縣百姓陰隱客家富、莊後穿井二年、已浚〔濬〕一千餘尺而無水。隱客穿鑿之志不輟。二年外一月餘、工人忽聞地中雞犬鳥雀聲。更鑿數尺、傍通一石穴。工人乃入穴探之。初數十步無所見、但捫壁傍

ども方に仙宮職位、主・主印を得て、飛行自在なり、と。工人曰く、既に是れ仙國、何ぞ吾が國の下界に在りや、と。門人曰く、吾が此の國は是れ下界の上仙國なり。汝の國の上に、還た仙國有り吾國の如し、亦た梯仙國と曰い、一も異なる所無し、と。言うこと畢り、工人に謂いて曰く、卿歸る可し、と。遂に卻きて山に上り、舊路を尋ね、又た白泉を飲ましむること數掬。山頂に至り穴を求むるに臨み、門人曰く、汝此に來たること頃刻と雖も、人間已に數十年。卻きて舊穴より出づるは、應に可ならざるべし。吾の通天關の鑰匙を奏請するを待ち、卿の歸るを送らん、と。工人拜謝す。須臾にして、門人、金印及び玉簡を攜え、又た工人を別路に引きて上り、一大門に至り、勢樓閣ひとに倅し。門に數人有り、俯伏して候つ。門人金印を示し、玉簡を讀むに。劃然として門を開く。門人工人を引きて上り。纔かに門に入るに、風雲の擁するところと爲りて去り、因りて觀る所無し。唯だ門人の好く去れ、吾が爲に意を赤城真伯に致せ、と云うを聞くのみ。須臾にして雲開き、已に房州の北三十里の孤星山の頂の洞中に在り。出でし後ち、陰隱客の家を詢ぬ。時人云う、已に三四世なり、と。井を開くの由、皆な知る能わず。工人自ら路を尋ね、唯だ一巨坑乃ち井を崩すの爲す所を見るのみ。時に貞元七年なり。工人尋いで家人を覓むるも、了に處を知らず。自後人間を楽しまず、遂に五穀を食らわず、足まかに信せて行く。數年の後ち、人、劍閣雞冠山の側近に於て之れに逢う有り。後ち在る所を知る莫し<sup>\*44</sup>。(『博異志』に出づ)

ここでは最初、井戸を掘るが、その深さが一千餘尺という途方もないものであった。唐代の一尺は31.1cmなので、三百メートル以上掘ったことになる。そのあと石穴があらわれる。これは横穴のようである。これを進むと、突然、日月のような光があり、山の上に降り立ったという。「吾が此の國は是れ下界の上仙國なり。汝の國の上に、還た仙國有り吾國の如し、亦た梯仙國と曰い、一も異なる所無し」という説明がなされている。世界が二重構造になっているようにもみえるし、あるいは地球を掘り抜いて反対側に出たようなイメージすらある。

「修行すること七十萬日、然る後ち諸天或いは玉京、蓬萊、崑閩、姑射に至るを得」にみえる「諸天」は先にみた洞天に相当するだろう。ここでは玉京、蓬萊、崑閩、姑射といった呼称以外に仙國、上仙國、梯仙國といった仙界の国名がみえる。金銀の宮闕というのは、『史記』卷二十八、封禪書第六の蓬萊山の「黄金銀爲宮闕」に類似しており、仙界の建物の典型的な記述であろう。

「白泉一眼、白きこと乳の如し」や「又た白泉眼に至り、之れを盥漱がしむるに、味、乳の如く、甘美なること甚だし。連らなり飲むこと數掬、醉えるが似ごとくにして飽けり」は、先にみた白飲や玉漿を想起させ、石髓(鍾乳石)に由

来する飲み物のようにみえる。

「汝此に來たること頃刻と雖も、人間已に數十年。卻きて舊穴より出づるは、應に可ならざるべし。吾の通天關の鑰匙を奏請するを待ち、卿の歸るを送らん」という記述によれば、もとの穴ではなく、通天關という門から出たことになっている。これは黄原の記述によく似ている。異なるルートでも帰ることはできるのである。

## 六、桃花源記

ここでは『箋注陶淵明集<sup>\*45</sup>』にもとづいて訓読した。

晉の太元中、武陵の人、魚を捕らうるを業と爲す。(漁人の姓は黄、名は道真)、溪に縁りて行き、路の遠近を忘る。忽ち桃花の林に逢う。岸を夾むこと数百歩、中に雜樹無し。芳華鮮美、落英繽紛たり。漁人甚だ之を異とし、復た前み行きて、其の林を窮めんと欲す。林、水源に尽き、便ち一山を得たり。山に小口有り、髣髴として光有るがごとし。便ち船を捨て、口従り入る。初め極めて狭く、纔かに人を通すのみ。復た行くこと数十歩、豁然開朗。土地平曠、屋舍儼然たり。良田美池桑竹の属有り。阡陌交通し、雞犬相聞こゆ。其の中に往來し種作す。男女の衣着は、悉く外人の如し。黄髮垂髻、並びに怡然として自ら楽しむ。漁人を見て、乃ち大いに驚き、従りて來たる所を問う。具さに之に答ふ。便ち要えて家に還り、酒を設け雞を殺して食を作る。村中、此の人<sup>ひか</sup>有るを聞き、咸な來たりて問訊す。自ら云う、先世、秦の時の亂を避け、妻子、邑人を率いて、此の絶境に來たり、復た出でず。遂に外と隔つ、と。問う、今は是れ何れの世ぞ、と。乃ち漢有るを知らず、魏・晋に論無し。此の人一一具さに聞く所を言うに、皆な嘆惋を爲す。餘人各おの復た延きて其の家に至らしめ、皆な酒食を出だす。停まること数日にして辞去す。此の中の人語<sup>さ</sup>げて云う、外人の爲に道<sup>ま</sup>うに足らざるなり、と。既に出で、其の船を得て、便ち向<sup>ま</sup>の路に扶い、處<sup>ま</sup>処に之を誌す。郡下に及び太守に詣り、説くこと此<sup>か</sup>くのごとし(太守、劉歆<sup>\*46</sup>)。即ち人をして其の往くに隨い、向に誌せし所を尋ねしむるも、復た路を得ず。南陽の劉子驥、高尚の士也。之れを聞きて欣然、親ら往かんとするも未だ果たさず、尋いで病んで終わる、後ち遂に津を問う者無し<sup>\*47</sup>。

狩野直喜に「桃花源記」の訳注<sup>\*48</sup>がある。そこに「(1) 桃花源記ハ陶淵明が己レノ理想境ヲ描キタルモノニテ、實ニ漁夫其地ヘ至リシ事アル譯ニ非ズト

行、俄轉有如日月之光、遂下。其穴下連一山峰。工人乃下山、正立而視、則別一天地、日月、世界。其山傍向萬仞、千巖萬壑、莫非靈景。石盡碧琉璃色。每巖壑中皆有金銀宮闕、有大樹、身如竹、有節、葉如芭蕉、又有紫花如盤、五色蛺蝶翅大如扇、翔舞花間、五色鳥大如鶴、翱翔樹杪。每巖中有清泉一眼、色如鏡、白泉一眼、白如乳。工人漸下至宮闕所、欲入詢問。行至闕前、見牌上署曰、天桂山宮。以銀字書之。門兩闕內、各有一人驚出、各長五尺餘、童顏如玉、衣服輕細、如白霧綠煙、絳唇皓齒、鬚髮如青絲、首冠金冠而跣足。顧謂工人曰、汝胡爲至此。工人具陳本末。言未畢、門中有數十人出云、怪有昏濁氣。令責守門者。二人惶懼而言曰、有外界工人不意而到、詢問途次、所以未奏。須臾、有緋衣一人傳敕曰、敕門吏禮而遣之。工人拜謝未畢、門人曰、汝已至此、何不求遊覽畢而返。工人曰、向者未敢、儻賜從容、乞乘便言之。門人遂通一玉簡入、旋而玉簡卻出。門人執之、引工人行至清泉眼、令洗浴及澣衣服。又至白泉眼、令盥漱之。味如乳、甘美甚。連飲數掬、似醉而飽。遂爲門人引下山。每至宮闕、只得於門外而不許入。如是經行半日、至山趾、有一國城、皆是金銀珉玉爲宮室城樓、以玉字題云、梯仙國。工人詢于門人曰、此國何如。門人曰、此皆諸仙初得仙者、關送此國。修行七十萬日、

然後得至諸天、或玉京蓬萊、崑崙姑射、然方得仙宮職位、主・主印、飛行自在。工人曰、既是仙國、何在吾國之下界。門人曰、吾此國是下界之上仙國也。汝國之上、還有仙國如吾國、亦曰梯仙國、一無所異。言畢、謂工人曰、卿可歸矣。遂卻上山、尋舊路、又令飲白泉數掬。臨至山頂求穴、門人曰、汝來此雖頃刻、人間已數十年矣。卻出舊穴、應不可矣。待吾奏請通天關鑰匙送卿歸。工人拜謝。須臾、門人攜金印及玉簡、又引工人別路而上、至一大門、勢侔樓閣。門有數人、俯伏而候。門人示金印、讀玉簡。劃然開門。門人引工人上。纔入門、爲風雲擁而去、因無所覩。唯聞門人云、好去、爲吾致意於赤城真伯。須臾雲開、已在房州北三十里孤星山頂洞中。出後、詢陰隱客家。時人云、已三四世矣。開井之由、皆不能知。工人自尋其路、唯見一巨坑乃崩井之所爲也。時貞元七年矣。工人尋覓家人、了不知處。自後不樂人間、遂不食五穀、信足而行。數年後、有人於劍閣雞冠山側近逢之。後莫知所在。〔『太平廣記』第二十卷神仙二十、陰隱客〔出博異志〕をもとに唐、鄭還古著『博異志』〔叢書集成新編 82、新文豐出版、1985年。顧氏文房小説〔明正徳嘉靖年間顧元慶輯刊本〕所収のもの〕を参照した。〔 〕は顧氏文房小説のもの

イフモノアリ。眞力實力、明白ナラネドモ、太元中ト漠然ト述ベシ所ニ一種ノ味アリ、故ニ「太元の頃か」とよト譯セリ」とみえる。『箋注淵明集』や『搜神後記』では「漁人姓黄名道真」と、この漁師の名前を特定するかのような記述を注として補っているが、本来、その漁師の姓名を書いていないところに面白さがあるのであろう。太元中は三七六年～三八六年で、陶淵明は三六五年～四二七年であるから、陶淵明の幼少の頃から、二十歳前後の頃までにあたる。狩野直喜は「太元中ト漠然ト述ベシ所ニ一種ノ味アリ」と述べているが、漠然として虚実皮膜の間にあるところに妙味があり、そこに個人の心情を投影する余地もあるのだろう。

ここでは「山有小口」であるが、『列仙傳』邦子では「山穴」である。狩野も「ふと見れば（向）に山ありて、其入り口と覺しき穴あり」と、この口を「穴」と訳している。またこの「屋舎儼然」の箇所は、邦子の「上有台殿宮府、青松樹森然、仙吏侍衛甚嚴」に、よく似た表現のように思われる。戦乱を逃れて隠れ住んでいるのだから、「屋舎儼然」というのは不自然な感を受けるが<sup>\*49</sup>、あるいは『桃花源記』は『列仙傳』の記述を下敷きにしていないかと思われる。小川環樹は「やはり『仙郷談』といちじめるしい類似を示す。というよりも、全くその形式をふまえたものだというべきであろう<sup>\*50</sup>」と述べているが、『列仙傳』の邦子には言及していない。

また、この「雞犬相聞」は、『老子』八十章の小国寡民に記される「…甘其食、美其服、安其居、樂其俗、鄰國相望、雞犬之聲相聞、民至老死、不相往來」の「雞犬之聲相聞」を想起させる<sup>\*51</sup>。この記述によって、この村が他の村と行き来していないことを示しているのだろう。

白川静は「陶淵明は神仙の郷を信じない<sup>\*52</sup>」と述べているが、その枠組みをうまく利用しているようだ。トンネルを抜けることは異界である仙界に行くための重要な手続きであった。他の方法では行き着けないのだろう。

それを人間界の話に援用したために矛盾が生じているように思われる。トンネルの深さは、中に入ってから数十歩でぬけられる程度で、ほのかな明かりがみえていたとされる。ということになれば、実際には、わざわざトンネルを抜けるまでもなく、ほんの少し丘を越える程度で、この村まで行き着けるのではないか。また、「雞犬相聞」とするならば、それは山の小口の外まで聞こえてくるのではないだろうか。この話を完全な事実とみなせば、以上のような矛盾が噴出して来る。とはいえ、仙界の話の枠組みをうまく利用することによって、当時の世俗と隔絶した陶淵明の考えた理想の世界を作り出す事に成功しているように思われる。なお古今圖書集成にこの陶淵明の描いた理想郷を同定しようとする文章が数多くみえるのは、陶淵明の描いた世界に真実味があり、似たような場所が実際に存在したであろうことを示唆している。

## 七、丹後国風土記佚文\*53

この話は、浦島太郎の話の原形として知られている\*54が、我々がよく知る話とはかなり異なっている。全部の話を紹介する余裕はないため、重要な部分のみ摘出してコメントしたい。浦島太郎ではなく嶋子<sup>しまこ</sup>であり、乙姫ではなく亀比売<sup>かめひめ</sup>である。亀はわざと嶋子に釣り上げられ、そのあと婦人に変化し、浦島を誘惑する。亀比売がわかかわかしい容貌を維持できるのは、浦島子の精気を吸い取っているからであろう。蓬山<sup>とよのくに</sup>という記述がみえ、中国の蓬莱山を意識した話であるとわかる。神仙思想では房中術も昇仙のための重要な技術である。一般に男性を対象としているが、『列仙傳』の女丸の話のように女性を対象としたものもある。

ここでは海の話であり、「穴」という記述はみえない。しかし、蓬山から、人間界にもどってくる時に「教令瞑目（教えて目を眠らしむ）」という記述がみえる。「教」は「おしえて」と読んだが、文法的には使役と理解した方がわかりやすいかもしれない。『列仙傳』巻下服閭にも蓬萊山を往来する話がみえる。服閭は、こそ泥を行うような人であったが、仙人の使用人であったため、長生きを保証されている。彼自身には仙人のもつ超能力はないが、蓬萊山を往復する際に目をつぶっているようにいわれる。服閭が目をつぶっている間に瞬間移動しているのである。この時の言葉が「教令瞑目」である。これは嶋子の話にみえる「教令瞑目」と、ほとんど同じ表現であり、丹波国風土記佚文の文章が『列仙傳』を下敷きにしていることは、ほぼ間違いないであろう。

瞑目、つまり、目をつむることは、トンネルの中に入ることによく似た効果をもつ。どちらも、真っ暗になるのである。この暗闇を抜けたところに、異なる次元の世界があらわれるのである。

嶋子の話において、「蓬山」に「とよのくに」とルビが振られていることも興味ぶかい。仙界と死者の世界は、かなりの程度、重なりあっているのである。嶋子が持ち帰った「玉匣<sup>たまぐしげ</sup>」は玉という材質ばかりではなく、「玉=魂」をいれる手箱という寓意をもつ。匣を開けたとき、白雲のようなものがたなびいて魂が飛び去ったとされるのは、当然のことである。なお玉匣が金縷玉衣などの玉衣をあらわす語\*55であるというのも面白い。玉衣もまた魂を守る衣服の形をした箱なのである。

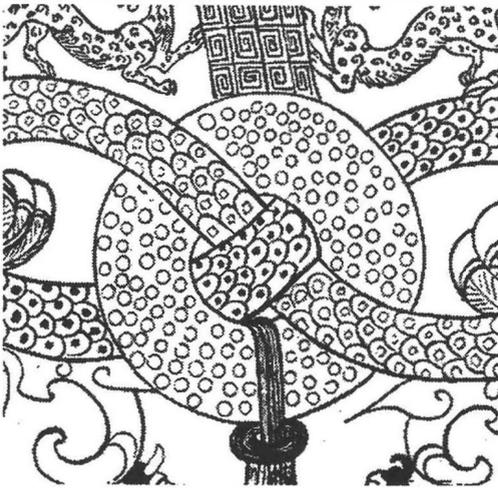
## 八、壁と龍と博山炉

馬王堆の帛画や棺には多くの壁がえがかれている。それらのうちのいくつかは龍がその穴を通り抜けている図柄で描かれている。

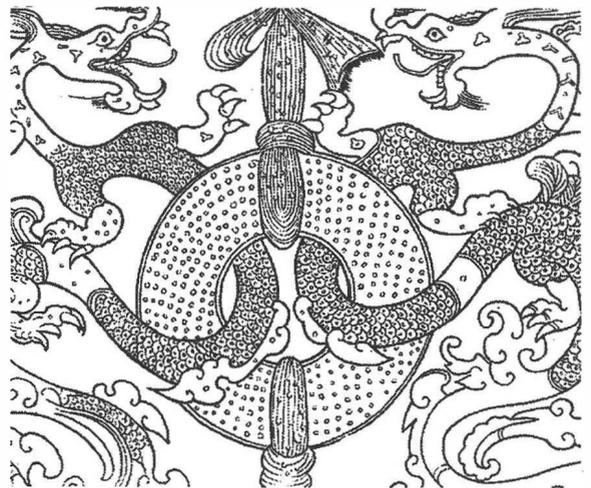
注45… 晉、陶潛撰、宋、李公煥箋。『四部叢刊初編』所収。

注46… 劉歆。劉歆（?～23A.D.）は前漢末から新の人であるため、ここは時代があわない。汪紹楹校注『搜神後記』、中華書局、1981年、6頁に考証がある。いずれも注釈あるいは別の文章が紛れこんだという考えである。

注47… 晉太元中、武陵人捕魚爲業（漁人姓黃名道真）緣溪行、忘路之遠近、忽逢桃花、夾岸數百步、中無雜樹、芳華鮮美、落英繽紛。漁人甚異之。復前行、欲窮其林。林盡水源、便得一山。山有小口、髣髴若有光。便舍船、從口入。初極狹、纔通人。復行數十步、豁然開朗、土地平曠、屋舍儼然。有良田、美池、桑竹之屬。阡陌交通、雞犬相聞。其中往來種作、男女衣着、悉如外人。黃髮垂髻、並怡然自樂。見漁人乃大驚、問所從來、具答之。便要還家、設酒殺雞作食。村中聞有此人、咸來問訊。自云先世避秦時亂、率妻子邑人至此絕境、不復出焉。遂與外隔。問今是何世、乃不知有漢、無論魏晉。此人一一具言所聞、皆爲嘆惋。餘人各復延至其家、皆出酒食。停數日、辭去。此中人語云、不足爲外人道也。既出、得其船、便扶向路、處處誌之。及郡下乃詣太守、說如此（太守劉歆）。即遣人隨其往、尋向所誌、不復得路。南陽劉子



図版 1



図版 2

図版 1 『長沙馬王堆一號漢墓上集』(湖南博物館、中国科学院考古研究所編、文物出版社、1973年) 図 24。棺に描かれた図を書き起こしたもの。

図版 2 同図 214。馬王堆一號漢墓帛画。

図版 3 「博山炉(楽浪)朝鮮楽浪石巖里第九号墳出土。重畳たる山岳、それは山のごとく、あるいは雲のごとく起伏している。これを受けて鳥、さらにそれを受けてカメが、承盤のなす大海のうちに浮んでいる」。水野清一編、世界美術全集 第 13 卷 中国(2) 秦・漢、角川書店、1968 年、145 頁。



図版 3

この壁の穴について、あの世とこの世を結ぶ出入り口ではないかと考察したことがある<sup>\*56</sup>。また博山炉は香炉であるが、博山と呼ばれる山とみなされている。ハスの蕾に似た香炉上部の山に煙の出る穴が開いているが、これは洞天につながる洞窟と見えないこともない。煙は天界にのぼるが、被葬者の魂は、煙に乗って天にのぼるとみなされたのかもしれない。博山炉は墓壁に描かれることがあるが、それは博山炉を通じて他界に行くことができると考えたからではと思われる<sup>\*57</sup>。また穴の中は洞天福地や壺中天のような別次元の世界をイメージしている。これらの穴は、いずれも先に考察した山穴や仙穴とその役割が類似している。

おわりに

仙伝や小説等に見える他界観念はつとに小川環樹が取り上げている。本稿で取り上げたテーマも、すでにそこで考察されているものである。しかし、山穴(『列仙傳』・『搜神後記』)、仙穴(『列仙傳』讚)、大穴(『搜神後記』)、一穴(『幽

明録』)、石穴(『博異志』)、小口(『桃花源記』)、天井(『搜神後記』)、井(『博異志』)、門(『搜神後記』)、大門(『博異志』)、通天関(『博異志』)とあらためて並べてみると興味ぶかい。

「穴」や「口」というのは現実に存在するものである。その中に居住するものもいる。ここでは取り上げなかったが『列仙傳』巻上赤松子には西王母の石室とみえ、西王母がそこに住むとみえる。澤田瑞穂は、財宝をもたらす洞穴について考察しているが、ここで取り上げたものは、いずれもトンネル状の通り道を通り抜けて、あの世に到着するといった例である。帰り道は必ずしも同じではない。

『山海經』の佚文<sup>\*58</sup>には鬼門<sup>\*59</sup>のことが記され、四川の画像石には天門<sup>\*60</sup>と記されている。烏山石燕の鬼の図<sup>\*61</sup>には洞穴が描かれ、鬼が食い散らした動物の骸骨らしきものも描かれている。言葉書きに「鬼門」の語がみえるため、それが鬼門のイメージなのであろう。「穴」は自然のもので、「門」は人為的な建築物である。けれども、その概念は、かなり重複しているとみてよいだろう。

紹介した話の中では、自然にできたようにみえる穴から入るものが多く、帰りはそのまま同じ場所を通るものもあれば、そうではなく門を通るものもあった。「穴」に入った人物も、その人物が来ることを待ち受けているものもあったが、いずれも道徳的にすぐれた人物だからそうなった、というような話ではない。

穴の向こう側にある世界は、仙界と呼べるのだろうか、そのあたりの概念が、いまひとつ整理されていないようである。『列仙傳』邗子の話では、亡くなった妻がいることから死者の世界である。そこに行き着ける人物が邗子という名で呼ばれていて、それはとりもなおさず仙人の意味であった。つまり仙界と死者の世界は同じものといえる。この邗子の話が、こういった話の最も初期のもので、この話をベースにして、さまざまな話へと発展していくのではないだろうか。

『搜神後記』の黄原の話、袁相・根碩の話などは、いずれも、仙女と結婚する話となっていて、それらはもちろん死者ではない。仙界と死者の世界とは、ここでは重なりあわない。だが、もどってきた根碩がぬけがらのように成ってしまう話は、尸解仙の話ともみなせるが、死者の世界とかかわっているようにみえる。丹後の国風土記の話は、やはり、仙界にいく話ではあるが、もどってきた嶋子が玉手箱を開けたところ、魂がとんでいく様子がしるされており、微妙に死者の世界とつながっている。

後世の怪談、たとえば「牡丹燈記」<sup>\*62</sup>では、鬼(死者の霊)と契りをおこなう話となっている。それらは、むしろ恐ろしい話として紹介されていて、決して望むべきものではない。明かに仙女と契りをおこなう話とは別のものとされている。

鬚、高尚士也。聞之欣然、親往未果、尋病終、後遂無問津者。(四部叢刊所収、『箋注陶淵明集』巻之五)

注48…『東光』5号(弘文堂、1948年)所収「桃花源記序」

注49…釜谷武志氏にうかがったところ、「秦末からこの晋代まで500年近くの時間が経過しているので、屋舎が整然としていても、おかしくはないと思いますが…」というご意見をいただいた。「良田美池桑竹の属有り。阡陌交通し、犬相聞こゆ」と確かに豊かな農村の雰囲気がある。また釜谷氏の『陶淵明』(都留春雄、釜谷武志、角川書店、1988年、鑑賞中国の古典、第13巻)を参照した。

注50…前掲『中国小説史の研究』273頁。

注51…このことは、これまでに多くの指摘がある。

注52…白川静『中国の古代文学(二)』(中央公論社、1976年)第七章 陶淵明と謝靈運、333頁。

注53…713年(和銅6年)、元明天皇が風土記編纂を命じた。ここは浦島太郎の話の原形とされる。

注54…三浦佑之『浦島太郎の文学史:恋愛小説の発生』(五柳書院、1989年)を参照。

注55…『後漢書』朱穆伝。

注56…拙著『魂のありか』  
(角川書店、2000年)

注57…「博山炉と香—蓬萊山との関わりを通して—」  
(『宮澤正順博士古稀記念  
東洋—比較文化論集』、青  
史出版、2004年)

注58…『論衡』訂鬼篇所引  
『山海經』佚文。

注59…水野杏紀氏(大阪  
府立大学人間社会学研究科  
修了)が修士論文「平安京  
の鬼門—その源流と変遷を  
探る—」で鬼門に関する  
興味ぶかい考察を行い、そ  
の後、博士論文「東北鬼門  
観の成立と展開に関する研  
究」(2012年)としてま  
とめている。

注60…四川画像石。また  
重信あゆみ氏に「西王母  
—天門で迎える神」人文  
学論集第25集、2007年、  
という論考がある。

注61…鳥山石燕[画]、稲  
田篤信、田中直日編『画図  
百鬼夜行』(国書刊行会、  
1992年)。

注62…明、瞿佑『剪燈新話』  
所収。

『桃花源記』は、そのような話を逆に人間界のものとしたのだろうが、その  
枠組みは明らかに、ここでとりあげた系列の話にもとづいており、その中でも  
『列仙傳』の影響を強く受けているように思われる。

漢代に墓室の壁や棺に画かれた壁は本来、埋葬用の壁などから発展してきた  
ものであろうが、その穴を通して別の世界に行くことが想定されていたように  
思われる。墓室に画かれた博山炉も同様に、その穴を通して異なる世界へ行く  
と考えられていたようだ。魂の居住する空間は墓自体であることもあれば、墓  
室をもそのうちに内包する地下世界である場合があり、天界である場合もある。  
いずれの場合も「穴」という視覚的なものが、そのイメージ形成に大きく寄与  
しているのではないかと思われ、それはここでとりあげた山穴等のイメージに  
も重なり合う。